

2013年度
神奈川大学非文字資料研究センター・
ソウル市立大学都市人文学研究所・上海師範大学都市文化研究センター 共催
第1回公開研究会

第1回アジア都市フォーラム 「アジア都市研究：回顧と展望」

日時：2013年5月29日～6月1日

場所：ソウル市立大学 国際会議場

後援：韓国研究財団 (NRF)

孫 安石 (非文字資料研究センター 研究員)

中村 みどり (早稲田大学 准教授)

石川 照子 (大妻女子大学 教授)

第1回アジア都市フォーラムの参加報告
—ソウルの都市研究で考えたこと

孫 安石

2013年5月29日から6月1日の日程で、韓国のソウル市立大学国際会議場において開催された第1回アジア都市フォーラム（神奈川大学非文字資料研究センター・ソウル市立大学都市人文学研究所・上海師範大学都市文化研究センターの共同開催）の開催経緯と日程については、会議の事務局を担当したソウル市立大学都市人文学研究所の正式な会議報告または http://ihuos.uos.ac.kr/temp14/ihuos_2010/main.jsp などへの掲載に委ねることにし、ここでは筆者が、今回の会議に参加しながら感じたことを幾つか書き留め、今後の都市研究を目指す研究者の一助になることを願う（大会プログラムについては表1を、個別報告については同号掲載の中村氏、石川氏の報告を参照のこと）。

世界経済のグローバル化が叫ばれて久しいこのごろ、

その動きに最も対応が遅いと思われた人文学分野（一先ず、史学、文学、哲学）の対応もいよいよ待ったなしの状況を迎えている。例えば、筆者が専門とする人文学の歴史学においてもその変化は例外なく押し寄せており、中でも「ジェンダー」、「環境」、「都市」研究の分野は、多くの新しい研究成果を生み出しているように思える。

同じ職場の同僚で朝鮮近現代史や日朝関係史を研究するY先生は、人生の先輩でもあり、学内の共同研究を進める仲間でもあることから、研究会は勿論、宴席でも一緒にすることが多いが、本人の研究範囲の中でも最もカバーできていない個所は、朝鮮のジェンダーに関連する部分であることを、幾度か口にするのを聞いたことがある。同じ反省は筆者にも当てはまるもので、中国史や都市史研究において今後ジェンダー分野の不勉強を補うしかない。また、環境問題については春と冬に黄沙とPM2.5が話題になる度に、これが一国の問題だけではなく、東アジアという地域を巻き込んだ研究と対応が必要であることを思い起こさせてくれている。これに福島



写真1 フォーラム閉会後の記念撮影



写真2 フォーラムの論文集・表紙

表1 大会プログラム

<p>第1回アジア都市フォーラム 「アジア都市研究：回顧と展望」 Asian Urban Research: Retrospect and Prospect</p> <p>5月30日 セッション1：アジア都市研究の展望</p> <p>(1) 大里浩秋 (神奈川大学) 『上海租界研究：台湾國史館所蔵資料の紹介』</p> <p>(2) 楊劍龍 (上海師範大学・中国) 『中国の都市化過程と都市文化の研究』</p> <p>セッション2：都市の経験と認識</p> <p>(3) 孫安石 (神奈川大学) 『上海の日本語新聞『上海日報』(1929年)が見た日中関係』</p> <p>(4) 石川照子 (大妻女子大学) 『日本人女学生の第一次上海事変体験—上海日本高等女学校校刊の考察—』</p> <p>(5) 中村みどり (早稲田大学) 『留日中国人作家の東京・上海文学地図—陶晶孫の活動』</p> <p>(6) 林春城 (木浦大学・韓国) 『The Topographical Map and the Identity of the Chinese Urban Film』</p> <p>(7) 金承郁 (ソウル市立大学・韓国) 『Spatial Perception of Koreans Residents on Shanghai in the Early 20th Century』</p> <p>5月31日 セッション3：都市住民と都会の変遷</p> <p>(8) 銭杭 (上海師範大学・中国) 『現代都市住民の伝統への追求』</p> <p>(9) 張貞娥 (仁川大学・韓国) 『From Squatter Area to “Wonderland” of Cultural Heritage: The case of Sham Shui Po in Hong Kong』</p> <p>(10) 李培徳 (香港大学・中国) 『The Historical Memory of Shanghainese in Hong Kong : Nostalgia, Cultural Identity, and Network Weaving』</p> <p>(11) Helga-Jane Scarwell, D. Leducq, D. Tran Dinh (リール第1大学・フランス) 『How Greater Hanoi, a Regional City in Transition, Manages the Implementation of Sustainable Development?』</p> <p>セッション4：都市と地域社会</p> <p>(12) Patrizia Ingallina (リール第1大学・フランス) 『Innovation Clusters and Universities Reorganization in the Greater Paris』</p> <p>(13) 南榮浩 (ソウル市立大学・韓国) 『“Where is My Village?” : Urban Village Movement, Identity Building and its Boundaries in a Downtown District of Seoul』</p> <p>(14) 彭善民 (上海師範大学・中国) 『NPO and the Juvenile Social Education of the Underlying Immigration』</p> <p>(15) 鄭聖勳 (ソウル市立大学・韓国) 『Intimacy and Publicness in Urban Communities』</p> <p>(16) 洪準其 (ソウル市立大学・韓国) 『Lacan’s Topology: Joyce’s Symptom/Sinthome and Placeness』</p> <p>総括 金承郁 (ソウル市立大学都市人文学研究所・韓国)、楊劍龍 (上海師範大学都市文化研究センター・中国)、孫安石 (神奈川大学非文字資料研究センター)</p>

原発問題が加われば、環境問題がすでに一国やアジアだけでなく、世界を巻き込む重大な問題であり、まさにグローバルな対応が求められていることが良く分かる。そして、1980年代に中国が世界経済に門戸を開いてから約30年が経過したいま、我々は北京、上海、広東、重慶、武漢など次々と登場する巨大都市の誕生を目の当たりにし、中国、ひいてはアジアの都市問題にどのように対応すべきか、様々な模索が試みられているように思われる。東京、ソウル、北京、上海という巨大都市がそ

れぞれ抱えていた固有の都市問題は今までは主に都市工学や都市計画、建築という理工系の共通テーマとして取り上げられる場合が多かったと言える。しかし、経済のグローバル化と共に都市に集中する人口が急増し、巨大都市が抱える問題は人文学の共通のテーマとして登場しつつある。

このような変化を最も鋭く察知し、「都市」研究において新たな地平を開こうとする試みの一つが、韓国のソウル市立大学による「都市人文学」という学問分野を定



写真3 『都市人文学研究』の表紙(左)とタイトル(右)

着させる試みであろう。今回のソウル会議に参加した時に、ソウル市立大学の都市人文学研究所の事務局の皆さんの話をうかがったところ、2008年から始まった都市人文学という研究分野は韓国政府の人文韓国(韓国ではHK研究と呼ばれる)プログラムの採択によって本格化し、2017年までの10年間という長期計画の下に研究が推進されているという。目論みは大きく、歴史学、哲学、文学と並んで「都市人文学」という研究分野を学問

の一分野として位置づけることというから、その試みは極めて大きい。そのための準備も着々と進んでおり、例えば、2008年に第1回目を開催した「都市人文学フォーラム」は2013年4月現在で合計35回の開催を積み重ね、韓国の国内学術大会は合計9回にのぼり、これらの会議とシンポジウムの記録は、『都市人文学叢書』として合計15冊が刊行されているという。また、年に2冊の学術専門の雑誌『都市人文学研究』を発行し、2013年4月号の第5巻1号までを刊行しているというから、この都市人文学研究に取り組むソウル市立大学の取り組みがなかなか本格的なものであることが伝わってくる(【写真3】の表紙とタイトルを参照)。

このような都市研究がその他の大学や地域の文化館、市立の博物館を巻き込みながら拡大されていく動きも注目に値する。たとえば、2011年3月にはソウル市清溪川文化館で「京城1930年」と題する展示会が開催された(同年10月には駐日韓国大使館東京文化院でも開催された。詳細な紹介はNews Letter『非文字資料研究』、第28号、2012年7月を参照)、2012年2月には「ソウル歴史博物館」にて1950年代から60年代に至る間のソウルを代表する繁華街を取り上げた展示「明洞ものがたり」(MYEONG-DONG NARRATIVES)が開催された。明洞という街はもともと朝鮮時代には漢陽の「南村」と呼ばれた地域で、1910年の植民地時期には日本人の居住地に隣接していたことからソウルを代表する繁華街として発展した空間であった。ところが、1950年の朝鮮戦争で明洞聖堂の周辺ごく一部を除き、灰燼に帰した街に画家、演劇人、音楽家が集まりソウル屈指の芸術の街として復活し、1970年代から80年代までは韓国の民主化運動を象徴する街として再び脚光を浴びるようになった。このようなソウルの都市の変容を人々はどうのように記憶すべきか、を問いかけるこの展示は、現代化をひた走るソウルの人々に大きな反響があった、と聞く。このような試みはソウル市立大学にも継承され、2013年6月5日～9月30日の間にはソウル市立大学の博物館にて写真展『1950'sソウルの記憶』が開催された。展示がまだ一般公開されていない時期であったにもかかわらず、筆者は海外からの研究者という理由でカラーのスライドフィルムに取まった1950年代のソウルを撮影した作品100点余りを鑑賞する機会を得ることができたが、それは正に朝鮮時代の遺構が残る街並みに日本の植民地とアメリカの支配が共存するソウルの街並みであったことが強烈な印象で残っている。

表2 タイトル(日本語訳)

都市人文学叢書1ー都市空間の人文的模索
都市人文学叢書2ー都市空間の形成原理と都市市民の生活
都市人文学叢書3ー都市の生活と文化
都市人文学叢書4ーグローバルポリスの両家性と都市人文学の模索
都市人文学叢書5ーローマ共和国とイタリアの都市ー統合と組織の歴史
都市人文学叢書6ー都市空間のイメージと想像力
都市人文学叢書7ーヴァルター・ベンヤミンーモダニティと都市
都市人文学叢書8ー現代哲学と社会理論の空間的旋回
都市人文学叢書9ー経済超越者と都市研究
都市人文学叢書10ー都市と権利
都市人文学叢書11ー都市の中の歴史
都市人文学叢書12ー現代思想と都市
都市人文学叢書13ー都市ー象徴・資本・公共性
都市人文学叢書14ー都市・性・愛
都市人文学叢書15ー都市・人間・人権



写真4 『1950's ソウルの記憶』の図録表紙
(ソウル市立大学博物館)

勿論、すべてが順調にしている訳ではなく、中でも学内組織の「ソウル学研究所」と「都市科学研究院」とのすみ分けは大変らしい。ソウル学研究所は、ソウル建都600年を記念して1993年にソウル市の支援の下に結成された組織で、「都市ソウル」そのものを研究対象にするものであることから、各種のシンポジウムや研究成果の発表などにおいても「都市人文研究」との重複は避けられない。おまけにソウル学研究所が発行する機関誌の『ソウル学研究』は2013年9月現在で合計第52号を数えているから、当然その効率性が問われることになる。



写真5 ソウル市立大学・第27回都市科学共同
作品展 (2013年5月30日)



写真6 ソウル市立大学の建築工学を専攻する学生の卒業
作品 (2013年5月30日)

さらに、分が悪いことに、ソウル市立大学の中には「建築」を中心とした従来の都市研究を拡大したもう一つの研究機関「都市科学学部」と「大学院」が並存しているという。こちらは都市行政、建築工学、都市工学、交通工学、環境工学、空間情報、都市の防災など従来の建築を基盤にしたカリキュラムをもつ教育・研究組織であるから、混乱はさらに大きくなる(写真5、写真6を参照)。

今回の訪問でも、各先生方は研究対象が重複する部分が最も苦慮するところであることを認めていたのも事実である。しかし、それとは反対にお互いが切磋琢磨する努力を積み重ねるきっかけになっていることも話されているから、その点は頼もしい。

ソウル市立大学が推進している都市人文「学」の成立の試みは、恐らくは時間の経過と共に解体と再構築を余儀なくされるだろうことはだれもが予想できよう。しかし、その中で新たな都市研究を目指す実験が大いに成果を上げられることを期待したい。また、それに協力していきたい。

「The 1st Asian Urban Forum」 —アジアにおける都市研究の交流—

中村みどり

昨年以來、政治面において波風の立つ日韓、日中関係であるが、そのようななか、5月29日から6月1日にかけて、ソウル市立大学都市人文学研究所で韓・中・日三カ国の研究者を軸とする、国際シンポジウム「The 1st Asian Urban Forum」が開催された。アジアの都市研究をテーマとする同シンポジウムは、上記研究所・上海師範大学都市文化研究センター・神奈川大学非文字資料研究センターが持ち回りで担当する学術交流の一環であり、昨年の上海でのシンポジウム「Urban New Media and Modern Shanghai」に続くものである。今回は、香港、フランスの研究者も含め、総勢16名による発表が行われた。本報告では、その中でもソウル市立大学の金承郁氏と上海師範大学の彭善民氏の発表を取り上げ、最後に執筆者自身の発表について触れたい。

「20世紀初頭におけるコリアン上海居留民の空間認識」 (金承郁)

1920～1930年代の多国籍都市上海のコリアン居留民に焦点を当て、朝鮮半島における近代都市空間上海の存在意義に関する考察がなされた。



朝鮮半島が日本による植民地支配を受けたこの時期、1930年代までは日本よりも中国に移住する者の方が多かったという。20世紀初頭、朝鮮総督府と南満州鉄道株式会社により朝鮮半島と中国大陸を結ぶ鉄道が開通したことは、上海への人口移動を促した。当時の上海をフランス租界、共同租界、中国人居住地に区分すると、フランス租界に住むコリアン居留民が圧倒的に多く、その背景には、政治活動の自由を認めていた同租界が朝鮮半島独立派の運動拠点となっていたことが挙げられる。一方、共同租界には商人やダンサーなどのコリアン居留民が住み着いた。総合的に眺めれば、当時の朝鮮半島にとって上海とは、日本を宗主国とする「帝国空間」に対抗する「自由な都市空間」であった。

興味深いテーマを明確な論旨で跡付け、アジア各都市のつながりから空間を重層的に捉える金氏の考察は、日中関係と日韓関係を分けて捉えがちな筆者の視野を大きく広げてくれた。

「NPOと上海〈流動児童〉に対する社会教育」(彭善民)

上海のNPOの「流動児童」(「農民工」の子供、都市の戸籍を持たず、都市に半年以上住む14歳以下の児童)を対象とした活動に関する調査報告が行われた。

2012年の時点で、中国全体の「流動児童」は1830万人以上に上るが、「民工学校」に通う彼らは、好条件の就職や高等教育への道が閉ざされ、社会の不安定要素となっている。上海の3つのNPOでは、①学習面や健康面、職業面での自己管理能力を高める、②合唱団を結成するなど芸術活動を行う、③都市住民としての道徳心を高めるなど、児童たちに対して積極的に社会教育を行い、児童やその親との間にネットワークを築くことに成功していると評価できる。しかし、今後の運営の存続と展開には、政府のNPOに対する一定の予算交付、戸籍に制限される大学受験制度の改善、そして学校教育、家庭教育と社会教育との連携が求められる。

「流動児童」を対象としたNPOの地道な活動に目を向け、その活動を丁寧に紹介した彭氏の発表からは、メディアが報じない日常の視点から眺めた上海の「今」の一面を知り得ることができた。

「〈留日作家〉陶晶孫の東京—上海文学地図」(中村みどり)

1906年から20余年日本に留学した中国人作家・医学者陶晶孫の都市東京と上海における足跡を辿り、「帝国日本」の中で自己を形成した彼が「半植民地上海」の

風景をどのように捉えていたかを考察した。

陶晶孫は日本のエリート教育を受けた知識人であり、彼の東京での住まいや通った学校の所在地を確認すると、皇居周辺の中心部を生活圏としていたことがうかがえる。これに対して帰国後の上海での活動は、日本人居住地、フランス租界、共同租界、中国人居住地を跨ったものであったことに気づく。陶の文学作品の主人公に見られる「彷徨」は、日本留学経験者として中国の現状に向き合う葛藤を表していることについて考察した。

会場からの質疑応答を通して、朝鮮半島の日本留学経験者との類似点、「彷徨」が上海文学全体を貫くキーワードであることを教えて頂き、また研究の過程で作中から陶晶孫の生活感を読み取る必要があることなどをご指摘頂いた。今後の課題としたい。

シンポジウムへの参加を通して強く感じたのは、政治的に困難な時期にこそ、全国各地の研究者が相互尊重の精神でもって交流を重ねることの大切さであり、また中国と他国とのつながりを踏まえてこそ、日本の中国研究も一層深まる、ということであった。最後になったが、シンポジウムの準備を進め、毎回緑豊かな大学の一番奥にたたずむ宿舎まで笑顔で送って下さったソウルの方々に心から御礼を申し上げたい。



写真7 左から、金承都、中村みどり、石川照子、孫安石(敬称略)

—架橋する都市研究の可能性—

石川照子

2013年5月29日から6月1日の4日間、ソウル市立大学で、国際シンポジウム「The 1st Asian Urban Forum」が開催された。そのベースはアジアの都市研究に取り組む日中韓三国の組織及び研究者によって構成されており、昨年の上海における上海師範大学都市文化

研究センター主催によるシンポジウムに続いての開催であった。なお2014年2月には、神奈川大学非文字資料研究センターが主催して開催する予定である。

今回のシンポジウムには、日中韓以外に香港、フランスの研究者達も参加して、大変多彩なテーマの報告が行われ、活発な議論が交わされた。この小文では、香港大学の李培徳氏と筆者自身の報告について簡単にまとめたと思う。

「香港の上海人の歴史的記憶——ノスタルジア、文化的アイデンティティ、ネットワーク構築——」(李培徳)

香港の上海人たちが、上海の都市生活の記憶と自身のアイデンティティについてどのようにとらえているのか、口述記録、メモワール、個人の伝記等の資料から考察がなされた。

1990年代を迎え中国への返還が迫る中で、香港人の身分という問題が注目されるようになった。一方上海は改革開放以後、社会は発展し経済水準も高まって、その姿は急速に変化していた。それに伴い香港、上海の両都市でノスタルジアという現象が生まれていった。ノスタルジアとは過去を美化することであり、自身のアイデンティティを築く手立てでもある。それは歴史、文学、映画に無限の創造空間をもたらしただけでなく、「香港人」と「上海人」という身分アイデンティティを凝縮する力も備えていた。90年代に出現した「上海ノスタルジア」の対象は、まさに上海が最も繁栄した1930年代の上海だったのである。

李氏は2003年1月から、香港在住の上海人への聞き取り調査を始め、報告では4人の事例を通して、それぞれの経歴と経験・感慨が紹介された。そしてそこから、(上海での)生活経験というものが身分アイデンティティの源であり、生活経験がなければ「アイデンティティ」を求めるとはできない、生活経験こそが香港の上海人の上海ノスタルジアの主要な推進力を成していると、結論づけられた。

長期間にわたる地道な聞き取り調査を通して、香港の上海人たちの具体的な証言を考察した実証的な報告であり、かつそれらの証言のディテールが大変興味深く、同様に上海について研究している筆者にとって、大変有意義な報告であった。

「日本人女学生の第一次上海事変体験——上海日本高等女学校校刊の考察——」(石川照子)

本報告では、日本高等女学校が発行した雑誌を手掛かりに、日本人女学生が第一次上海事変をどのように経験し、何を感じたのかという考察を通して、当時上海に生きた日本人たちの“感情”とその特色についての考察を試みた。

日本人学校はみな租界にあつて「治外法権」的自由を享受し、自国の教育体系もそのまま持ち込まれていた結果、日本人と現地中国人との対等な交流は妨げられ、多くの日本人の中国人に対する蔑視と同情の感情を生み出すこととなった。

1931年1月28日、第一次上海事変が始まると、排日運動が上海でも激化して、日本居留民の生活においても脅威を感じるようになった。そして戦争を目の当たりにするという経験は、上海の日本人の生徒たちにも強烈かつ深刻な衝撃を残した。

女学生たちの回想録からは、事変勃発に伴う不安と恐怖、一般中国人への憐れみと同情、中国人便衣隊の恐ろしさと自警団、日本兵の頼もしさと彼らへの感謝の気持ちを見ることが出来る。また、戦場と化して破壊され無残に変わってしまった上海の光景に心を痛め、自身が育ち暮らしたその上海への思いは残り続けたと言える。

そして3月の停戦を迎えるまで、戦争への嫌悪と批判の気持ちの反面、戦う勇敢な日本兵と勝利した祖国日本に対する感謝と誇りの念を、女学生たちは強く抱き続けていた。

続く質疑では、「軍国少女」の意味、事変に対する日本にいる女学生との反応の違い、上海の日本人の閉鎖性・保守性、上海の日本人の生活の復元による上海研究イメージの如何等の貴重な質問と指摘を頂いた。

ソウルを訪れたこの時期は、一年の中でも最も美しい季節だとうかがった。そんな素晴らしい季節にアジア各国をはじめとする研究者が共に集い、多彩なテーマを通して都市研究の現在を理解し、将来を展望しあえたことは大変貴重な機会であり、日中、日韓といった二国間交流にとどまらず、多国間を架橋する都市研究の可能性というものを実感させられた。

最後に、終始万般行き届いた心遣いを示して下さった、主催校のソウル市立大学の先生方と学生さんたちのホスピタリティに対して、心から感謝を述べたいと思う。